過去の追憶にその身を
まぎれこませるようなやさしい諦念

人の話に耳を傾けること、人の書いた本の頁をひらいてそこに書かれた言葉を読むこと

中条省平

三浦衛 著

▶鰯 hadahada

9・26刊 菊判変型108頁 本体2200円

春風社

三浦衛は過激なアヴァンギャルド精神の持ち主です。そのことは氏の小説『マハーヴァギナあるいは巫山の夢』を一読すればよく分かります。あの奇体な幻想を連ね小説の常套的手法を次々に打ち破るアグレッシヴな作品は、内田百閒とハンス・ヘニー・ヤーンの時空をこえた合体のごとき趣きを呈して、読む者を瞠目させました。いや、それどころではありません。私は心のなかで叫びました。この何でもありのハチャメチャぶりは何なんだ？　お前はキャプテン・ビーフハートかローランド・カークか！

三浦氏がジャズ狂いであることは知っていましたが、今回の詩集『鰯』にその名も「ジャズ」という詩が収録されていて、こう書かれています。

「すばらしい音楽があるのに、／なんでそんな／ちゃらちゃらした音を鳴らすのさ／馬鹿をお言いじゃない、／毎日が辛く悲しいのに、／なんで好き好んで／辛く悲しい毎日を思い起こさせる／音楽をやらなければいけない？」

私はほとと思いあたり、自分の浅墓な理解を恥じました。そうだ、三浦衛の前衛的なジャズ精神の底に沈んでいるのは、この辛く悲しい思いなのだ。その厚い壁をブレークオンスルーするためには、あの鬼面人を驚かす反則すれすれの小説技を繰りだして、衛るより先に攻めなければならない。あれは痛切な必要にかられた背水の陣なのだ、と。

そう思ってみると、詩集『鰯』には、鉞の一閃を振るって辛く悲しい今を打開すべく不穏な気配を巻きちらす詩もいくらかはありますが、むしろ辛く悲しい今の一日からそっと身をそらし、はかないが決して消えない過去の追憶にその身をまぎれこませるようなやさしい諦念に満ちている気がします。

「一日を思い浮かべ／いそぎの用事はどうやらなく／自恃のこころもなし／思い出は中之島／ながれる川に　浮かぶ」（「こんな日は」）

とりわけ引用部分最後の二行。追憶の甘美なやるせなさをこれほど見事に歌った詩句はめったにありますまい。私はこの二行を生涯忘れないでしょう。

『鰯』が過去の追憶にむかう書物であることは、本書の「あとがきに代えて」と副題された「陽子先生」という文章を見れば明らかです。これは小学校一年のときの担任の死を機に書かれたおくやみの一文であり、自分を学校での辛く悲しい日々から救ってくれた人に感謝するなんともやさしい追憶の一文なのです。

『鰯』の追憶の主調をなしているのは、「とじぇね」という、三浦氏の故郷である秋田県の言葉です。本書に収録された唯一の散文詩「とじぇねわらし」のなかに、「秋田では寂しいことを『とじぇね』。徒然からの転訛でしょう」という説明があって、私は虚を突かれました。「とぜん（つれづれ）」が「とじぇね（さびしい）」に姿を変えたとは。そして、ここに三浦衛の魂のふるさとがあったのだ、と。

「子供のころ、とじぇねわらし（童）でありました。とじぇねとじぇねと、お念仏よろしく唱え右往左往していましたが、まぶしさをこらえながら小学校へ通うようになり、授業でセンセーの話を聞いているうちに、とじぇね気持はだんだん薄くなり、消えて無くなりはしないけれど、さされたブツブツがいつしか平らにかなっていきました。これ、つたなき原体験」（「とじぇねわらし」）

とじぇねわらしの辛く悲しい毎日を救ったのは、陽子先生の言葉だったのです。これを少年の魂の救済といわずして何といえるでしょうか。

人の話に耳を傾けること、人の書いた本の頁をひらいてそこに書かれた言葉を読むこと。そのことの喩えようもないありがたさ。『鰯』が語っているのは、もっぱらその単純な一事に尽きる、といってもいいかもしれません。

このとじぇねわらしは長じて学術書を出す本屋の社長になり、ひたすらセンセーたちが書く本の原稿を読む仕事に就きます（いまでもその仕事を続けています）。その言葉に「目を凝らし、耳を澄ませているうちに、「尾てい骨のあたりに巣食うとじぇね気持ちはスーッと…」、「広々とした野原へ連れ出され、息を深くしている自分に気づきます」。

そう、人の言葉に耳を澄まし、人の書いた本の頁をひらいて人の言葉を読むことは、広々とした野に出て、過去をあらたに今として生きなおすことなのです。これはまさに時の再生の秘儀です。しかし、三浦衛はそんな野暮なことはいいません。ぽつりとこうつぶやくのみです。

「野に出るように／頁をひらく／コスモスが咲いている／という一行から／体調のよい日なら／何十年も前に見たコスモスが／いまも秋風に揺れている」（「いまひらく頁」）

野とはすでに開かれた平らかな土地ではありません。野人、野蛮、野性といった言葉が示すように、既知から未知へと向かうワイルドな空間なのです。野に出た三浦少年は次にどんな場所へ進むのか。

「大寒や少年の声ふとくなる」

これが『鰯』の最後に置かれた一句です。

（学習院大学フランス語圏文化学科教授）